

令和元年6月11日現在

機関番号：32675

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K03058

研究課題名(和文) 太平洋現代芸術の人類学的研究 ニュージーランド太平洋系住民のアート活動を中心に

研究課題名(英文) Anthropological Study on Pacific Contemporary Art: Art Activities of the Pacific Peoples in New Zealand

研究代表者

山本 真鳥 (YAMAMOTO, Matori)

法政大学・経済学部・教授

研究者番号：20174815

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：ニュージーランド・オークランド市では、戦後に始まった太平洋系の移民の間でアート活動が活発に行われている。欧米でもはやされた太平洋芸術のアート・スタイルやデザインを流用して自分なりにアレンジして始まった彼らのアート活動は、オリジナリティが重視される欧米のアートの枠組みの中で評価されてきた。オークランド市の多文化状況や、混合結婚によるコンタクト・ゾーンが、彼らのヘリテージを意識させ、アイデンティティの追究がアート活動に結びついてきたが、若い人々の間では、本国の人々とのつながりを意識しつつも、むしろ移民としてのアイデンティティを追究したり、社会問題に切り込んでいくアート活動が盛んになりつつある。

研究成果の学術的意義や社会的意義

いわゆる太平洋芸術とは欧米の側で作りに出た分類であることを明らかにし、今日支配的になっている欧米のアートの概念の特性を明らかにした。ニュージーランド・オークランドで展開されている太平洋現代芸術の作品は、スタイルやデザインで旧太平洋芸術からの借用はあるものの、欧米のアートの概念に沿った展開となっていることを示した。芸術や文化の創造において、コンタクト・ゾーンが有効に働くことを示した。そうした環境の中で、マイノリティにとって芸術のヘリテージは資源であり、アイデンティティは意識下に置かれるものとなる。

マイノリティの存在は、マジョリティにとっても社会を豊かにする上で、有意義であることを示した。

研究成果の概要(英文)：It is only after WWII that Pacific peoples started to migrate to New Zealand. Auckland is the city where the Pacific peoples are highly concentrated, although they are still minorities. In 1980s, some self-made Pacific artists started their activities. Their artworks were different from so-called Pacific Art famous among European art circles in a way that each of them wanted to create original style of their own following the European Art tradition, although they appropriated some design of the heritage. Multicultural situation in Auckland created a contact zone which affected them in perceiving their own identities in their creation of artworks. Nowadays, young Pacific artists of the second generation migrants are often children of mixed marriage and graduates of art schools and universities. Although they respect their parents' homelands, they are more aware of the living situation and the social issues of the Pacific peoples in the host society expressing in their artworks.

研究分野：人文学・文化人類学

キーワード：文化人類学 ニュージーランド 現代アート アイデンティティ ヘリテージ ポストコロニアル 移民 ポリネシア

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 太平洋(オセアニア)芸術は、むしろ欧米でもてはやされてひとくくりにされたジャンルであり、神像など儀礼に用いられる彫像、カヌーや武器、器など道具類、衣料や物質文化のための材料として用いられた樹皮布、植物繊維を用いたマット類、アクセサリーを始めとする装飾品など多々あるが、現在では欧米の美術館・博物館に太平洋の物質文化/アートとして展示されている。19世紀終わりから、20世紀初頭にかけて、アフリカやアメリカ大陸由来の品々と併せてプリミティブ・アートとして、欧米のアーティストやコレクターにも好まれ、絶賛されたという歴史がある。

(2) 1970年代以降、太平洋諸島が順次独立する頃、時を同じくして、各地で「芸術家」が誕生するようになる。伝統的ないわゆる太平洋(オセアニア)芸術のデザインや彫像のスタイルを流用した部分がある反面、それを自分なりに換骨奪胎したモダンな要素も含んだそれらの芸術は、ある意味で祖先のヘリテージを継承するとともに、アーティストのアイデンティティを示す作品でもあった。しかし、現地ではアート市場がほとんど成立しておらず、欧米社会のアーティストのようにアートを売って生活するというビジネス・モデルはなかなか成立しにくかった。

(3) 同時に、第二次世界大戦後に始まる太平洋諸島(特にポリネシア)からの海外移民は、環太平洋先進国の諸都市にコミュニティを形成するようになった。なかでも、ニュージーランド・オークランド市はポリネシア人人口が世界でも最大となる都市として知られる。ここで、1980年代に太平洋諸島からの移民が、現代アートの活動を始めた。太平洋現代アートは、歌やダンス、演劇などのパフォーマンス・アーツから、フィルムメイキング、写真、絵画、彫刻などのヴィジュアル・アートに至るまで多岐にわたっている。現代アート(特にヴィジュアル・アート)といっても、アヴァンギャルド的なものばかりでなく、伝統的な手法の延長にある絵画・彫刻も含め、(1)のようないわゆる太平洋芸術とは一線を画した、同時代人による、作者のあきらかなアートが盛んに製作されるようになった。

(4) その中心をなすのが、タウタイという太平洋諸島出身者の芸術活動をサポートするNPO団体である。芸術家たちの展覧会を主催したり、斡旋したりする一方、それらの広報を行ったりもする。若いアーティストを育てるセミナーやワークショップを開催するなどの活動も行っている。また、クリエイティブ・ニュージーランドという芸術活動を助成する独立行政法人も、太平洋諸島出身者への人口比に応じた助成を行っており、国内ばかりか海外での発表機会なども得られている。本国にいればこうした助成が得られることはほとんどないが、こうして移民先で活発な現代芸術の活動が行われるようになり30年以上が経過した。

2. 研究の目的

脱植民地化時代、さらにポストコロニアル時代に入って、太平洋各地でアーティストが誕生し、アート活動が生成している。が、もっともこれが盛んなのは、皮肉なことにニュージーランドの移民コミュニティとその周辺である。この研究は太平洋(オセアニア)現代アートを文化人類学の視点から研究することを目的としている。

移民先でのさまざまな条件が、本国社会よりもアート活動を容易にしていると思われる。というわけで、この研究は主に以下の仮説について、検証を行う。

(1) 西欧流のアート・システム、美術館があり、メディアでアーティストの活動を観察することができ、アート市場が存在することに気付くこと。

(2) 自らの文化的背景を媒介とした独自のアート・スタイルの開発が可能なのに気付くこと。文化遺産やアイデンティティへの気づきがあること。

(3) 多文化状況の中で、アートのコンタクト・ゾーンが形成されていること。

(4) 美術学校(ヴィジュアル・アート、映画・ビデオ、パフォーマンス・アーツなど多岐に渡る)や大学の美術学部などの美術系の高等教育システムが存在していること。

(5) 同じポリネシア系の先住民マオリ人の中で、西欧文化との融合をさまざまな文化表現の中で実施している先例があったこと。

(6) 本国と違ってアート市場が存在することによって、アートで生活していくことが可能になったこと。

3. 研究の方法

オークランドでのタウタイ(太平洋系アーティストのサポートをするNPO)を中心としたアート活動(展覧会やパフォーマンスなど)を観察し、アーティストにインタビューを行う。ま

た美術史の立場から太平洋現代アートとアーティストを紹介する書籍がかなり出版されているので、それらの記事についても文献調査を行う。またサモア、フィジーにてアーティストやサポートする人々について、現地調査を行い、比較検討を行う。

4. 研究成果

それぞれの仮説ごとに整理する。

(1) まず、サモア独立国とアメリカ領サモアのアート環境について。アメリカ領サモアには1970年代に公益財団が博物館を設立したが、絵画等アートの展示を始めたのはごく最近である。ただし展示品にサモア人の作品は少ない。サモア独立国では博物館は20年ほど前に設置されたが、ほとんどアートの展示はない。教会の経営する中等学校に1980年代頃に併設した美術学校が存在している。またこの教会の付属施設として10年ほど前に美術館が設置され、主に美術学校の生徒の作品などが展示されている。ただし、アートといっても、アートの神髄を享受するというよりは、アカデミックな教科についていけない生徒について、教科を補いかつ、観光などの現場で働くことを視野に入れていようにも見えた。

サモア独立国でかつて高校で美術の教師をしていた人（現在はアメリカ領サモア在住）のインタビューでアートへの渴望があったが、そのような望みを実現する方法は限られていたという証言を得ている。彼は国内にあった師範学校を卒業し、その後、やや独学で美術教師となった。国外での出版本の挿絵をしたりしながら、公務員の海外派遣制度などを活用して海外のアートにも触れた。その後、アメリカ領サモアの高校で美術教師をした。そうやって、創作意欲をある程度満たす活動を続けた。

しかし、アート市場が限られているため、フルタイムのアーティストになることは難しかった。

一方、フィジーでは、南太平洋大学オセアニア芸術文化センターが約20年前に設立されて、アーティストを育てた結果として、ヴィジュアル・アートのレッドウェーブ運動（主に絵画）が生じた。また、近年はパフォーマンス・アーツでもめざましい活躍をしている。絵画について例外的に成功しているのは、太平洋諸島でも中心をなす都市スヴァ（フィジーの首都）にある国際機関などで働くために数年間滞在する欧米人人口が常に一定数おり、彼らによってアート市場が存在しているからである。ただし、このようなフィジーの環境はオセアニアでは例外的であるといえる。

以上のような本国の環境を考えると、海外移民の置かれているアート環境はずいぶん異なるものであるといえる。美術館などを通じてアートに触れる機会を自然に得ることができ、絵画が高く取引されるという事実を目の当たりにすることもある。

(2) 太平洋芸術について、たとえば移民してきた太平洋諸島出身者について、本国でどれだけ日常に伝統的なアートと接することがあったかは疑問である。サモア人の場合タトゥーは日常的に目にするものだったが、樹皮布やダンスの持ち物となるようなものは見ていたと思われるが、それ以外はあまりない。また他の諸島の文化遺産、特に欧米で高い評価を受けるメラネシア産の造形美術に出会うチャンスはあまりなかったであろう。その点、プリミティブ・アートや太平洋芸術のコレクションを見ることができ、図書館で書物を閲覧可能であるということは大きな意義をもつ。日常的には差別的な視線を意識しながら、欧米人によっても賛美の対象となるアートのかたちに出会うことは自らの誇りを取り戻す過程でもあった。

(3) 多文化社会であるニュージーランドに住む彼らは、職場、学校等々で多文化状況に接する機会が多い。そうして、最初にアート活動を始めた人々も含め、アーティストには混合結婚をしているケースや、そもそも親が混合結婚で、両親の異なるルーツを継承している場合も多い。3つ以上のルーツを持つ人も珍しくないのである。また、近年、東南アジア、南アジア、西アジア系の人々、韓国・中国出身者、太平洋系の中でも異なる諸島出身者なども集まり、入り交じって共存している。こうして、多文化状況下のオークランドはさまざまな文化に接する機会がたいそう多い。これが、アート活動に影響をもたらす可能性は十分にある。コンタクト・ゾーンが、アイデンティティについて意識的に考え、新たな創造を生む場となったということである。

(4) 最初に太平洋現代芸術のアーティストとなった人々は、独学の人が多く含まれていたが、やがて、大学の美術学部、美大、美術学校、映画学校、演劇学校などを卒業した人が活躍を始める。ニュージーランド全体に高等教育を享受する人々の比率が高まるようになり、太平洋系の人々の間でも大学や工専などへの進学が増加している。現在では、活動しているアーティストのほとんどは大学で美術を学んだ人々で、修士号、博士号を得た人すら含まれている。これも本国とは大きく異なるところである。

(5) アートについて一歩も二歩も先を行っているマオリ人の活動を見本とすることができたことは後発の太平洋系の人々にとって意義深いことであった。マオリ人はもともと豊かな神話世界をもち、また各地に口頭伝承が数多く残っている。口頭伝承に基づく神像などの彫像を集会所に彫刻する慣習をもっていた。マオリ人は早くから師範学校や美術学校で欧米式の芸術教育

を受けることがあり、神話のデザインと欧米のアートとを融合させるモダンなマオリ・アートを編み出した。また縁取りやタトゥーなどに用いるデザインなどのアート・フォームもある。それらを流用し、自分なりのデザインを創作することをマオリ人アーティストが行ってきている。現代マオリ・アーティストの作品はすべて作者名の知られたもので、それ以前の作者不詳のものとは大きく異なっている。そうしてマオリ人のアート活動の成果を目の当たりにすることがよい経験となった。デザインの流用の仕方といったアートの手法ばかりか、アピールの仕方、神話などの口頭伝承の利用の仕方、場合によってはアート・マネジメントについても見習っていくこととなった。

(6) アート市場が存在していることは、確かであり、一部、現代太平洋芸術のアートのコレクターも存在はしているが、アートだけで生活が成り立っているアーティストはまだ少数派であることが調査により解った。生活が成り立つからオークランドに太平洋系のアート活動が盛んであるとは必ずしもいえない。もちろん、アートだけで生活が成り立つアーティストは太平洋諸島国ではまず存在しない。例外的であるのはフィジーである。(1)に書いたとおり、ある程度のアート市場(絵画が主)が存在しているために、アーティスト集団が生活していく余地がある。しかし、フィジー以外ではなかなか厳しい。それに比べて、数人の成功者がいることが人々を勇気づける。そして、フィジーでのオセアニア芸術センターに優るとも劣らない存在が、タウタイである。タウタイの活動に助けられ、そこで培われた仲間意識はアート活動を継続する勇気となる。そして、オークランド市が行っている市民のアート活動を促進する施設や支援も人々のアートへの意識を高めている。さらに、オークランドがグローバルなアートの世界への入り口となっていることも太平洋系の人々の背中を押しているということもできるだろう。

仮説で考えていたことと別に気づいたことを以下に述べたい。

(7) 従来の太平洋(オセアニア)芸術では、製作した人、アーティストが誰かということは記録もされないことが多い。現地社会で製作した当初は人々に知られているはずであるが、その事実を長らく伝えていくような制度は無かった。欧米の博物館や美術館に展示されている物質文化/アートについても、どこで収集して、何族、何人の作品という記録はあっても、製作者の名前が記録されてはいない。それに対して、現代太平洋(オセアニア)芸術は、欧米のアートの伝統と同様に作家のオリジナリティが尊ばれ、作家名が無名であることはない。欧米のアート活動の文脈は現代ではグローバルなルールとなっており、現代太平洋アーティストの間でも共有されている。

(8) 最近の太平洋(オセアニア)系の作家の間では、オセアニアの文化遺産に題材をとるよりも、現在の移民が置かれた状況—賃金水準が低く、恵まれない労働環境に置かれている—を批判すること、また太平洋(オセアニア)を長らく支配してきた植民地主義やポストコロニアル状況を批判することが大きなテーマとなって来ている。移民は自主的にやってきたのだから、彼らに批判する資格はないとの主流社会の側からの論調もある。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計9件)

山本真鳥、オセアニア芸術とは何か?—王立アカデミー開催のオセアニア展によせて、経済志林、査読無、2019、86巻3・4合併号、pp.305-329

山本真鳥、文化と経済、桑山敬己・綾部真雄編、詳論文化人類学—基本と最新のトピックを深く学ぶ、ミネルヴァ書房、査読有、2018、pp.45-60

山本真鳥、経済人類学と構造主義歴史人類学—マーシャル・サーリンズ、岸上伸啓編、はじめて学ぶ文化人類学—人物・古典・名著からの誘い、ミネルヴァ書房、査読無、2018、pp.108-113

山本真鳥、文化とパーソナリティーガレット・ミード、岸上伸啓編、はじめて学ぶ文化人類学—人物・古典・名著からの誘い、ミネルヴァ書房、査読無、2018、pp.47-52

Matori Yamamoto, The bodies and art forms of Pacific Islander artists, in Ikuya Tokoro and Kaori Kawai eds. An Anthropology of Things, Trans Pacific Press, 査読有り、2018、pp.321-326

山本真鳥、フィン・マツト復興運動と女性の現金獲得—サモア独立国ジェンダー開発政策、経済志林、査読無、2018、85巻4号、pp.775-802

山本真鳥、グアム島開催第12回太平洋芸術祭と文化の政治、経済志林、査読無、2017、84巻4号、pp.103-132

山本真鳥、イフォガー—サモア社会の謝罪儀礼、丹羽典生編、<紛争>の比較民族誌—グローバル化におけるオセアニアの暴力・民族対立・政治的混乱、春風社、査読有、2016、pp.43-66

Matori Yamamoto, Glocalization of the election system and the modernization of Samoa, in T.Uesugi & M.Yamamoto eds., The Perspective of Glocalization: Addressing the Changing Society and Culture under Glocalization, 査読有、2016、pp.83-107

〔学会発表〕(計8件)

- 山本真鳥、ヘリテージとアイデンティティ—オセアニア芸術とオセアニア現代アート、第36回日本オセアニア学会研究大会、2019年3月25-26日、首都大学東京、査読無
- Matori Yamamoto, Heritage and Identity: Art activities of Pacific Islander migrants in Auckland, New Zealand, The 18th IUAES World Congress, July 16-20, 2018, Florianopolis, 査読有
- 山本真鳥、ヘリテージとアイデンティティ—ニューージーランド在住太平洋諸島移民のアート活動、日本文化人類学会第52回研究大会、2018年6月1-2日、弘前大学、査読有
- 山本真鳥、グローバル化する互酬性—サモア世界の儀礼財と現金の循環、日本オセアニア学会関東地区例会(招待講演) 2017年11月25日
- 山本真鳥、グローバル化する互酬性—サモア世界の儀礼財と現金の循環、京都人類学研究会新入生歓迎講演会(招待講演) 2017年4月14日
- Matori Yamamoto, Analyzing Fashion Show in the Pacific Festival of Arts, CASCA/IUAES 2017 Conference, May2-7, 2017, Ottawa, 査読有
- Matori Yamamoto, Conflicting Discourses of Samoan Identities, American Anthropological Association Annual Meeting, Nov.16-20, 2016, Minneapolis, 査読有
- Matori Yamamoto, Recent Revival of Fine Mats Production in Samoa, Pacific Arts Association Pacific Chapter Conference, Sept 28-Oct.04, 2016, Nukualofa, Tonga. 査読有

〔図書〕(計3件)

- 山本真鳥、グローバル化する互酬性—拡大するサモア世界と首長制、弘文堂、2018、291pp.
- Tomiyuki Uesugi and Matori Yamamoto eds., The Perspective of Glocalization: Addressing the Changing Society and Culture under Glocalization, CGS Studies, Seijo University, 査読有、2016、173pp.
- 内堀基光・山本真鳥編、人類文化の現在—人類学研究、放送大学教育振興会、査読無、2016、284pp.

〔その他〕

ホームページ

<http://www.t.hosei.ac.jp/~matoriy>

ウェブマガジン

山本真鳥、オセアニアの今—伝統文化とグローバル化

<https://oceania.hatenablog.jp/>